

Title	英国資本主義の成立過程序論
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.4 (1936. 4) ,p.473(51)- 508(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19360401-0051
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360401-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英國資本主義の成立過程序論

野村 兼 太郎

近世社會の成立が突如として形成されたものでなく、中世社會の内部に存してゐた矛盾が漸次に成熟し、成長したものである。中世社會に於ける近世的萌芽を抽出し、近世への發展過程を跡づけることは、近世社會内に存する中世的殘滓を明かにすることとなり、又同時に近世社會の意義を明確にすることにもなる。しかしこれをなすのは、近世と中世との特質をそれぞれその典型的なものについて對照する必要がある。

中世社會に於いては各一つの社會が統制された調和を有つ社團であつた。各社團はそれだけで獨立せる生活を營み得るものである。もしその調和を破るものがあるとするれば、それは罪惡と見做される。

經濟上より見れば、それは自給自足の經濟である。しかもその重點を置くところは足ることにあつて、給することではない。即ち生産よりも消費に重きを置く。従つて生活することを限度として生産が行はれる。生産は消費を基準として行はれる。消費に依つて統制される。消費に依つて統制せんとする時は當然消費の限度を明かにす

る必要がある。即ち差別を生ずる。そこに中世の身分的區別が発生する。

一 社會内にある支配階級と被支配階級との生活程度に差別があり、それが先天的な身分觀念に依つて規範づけられる。しかしその生活程度の差違はあるが、生活それ自體はすべての者に保障されてゐる。需要が局限され従つて生産の技術的進歩が甚だ遅々であつたから、生活程度の著しい向上は起らず、各人の生活は、各地方の農業的生産に依つて大體支持することが出来た。唯不時の災禍に對するために一定の貯蔵を必要とするのみであつた。従つて一社會内の消費を豫め測定し、全體の生産を計劃することは不可能なことではなかつた。

中 消費を目的とする中世社會の生産に對し、近世社會に於いて生産は營利を目的とする。營利に多くの機會を與ふるものは流通社會である。貨幣が流通媒介の要具として發達し得る社會に於いてのみ營利行爲が是認される。従つてそれは地方的封鎖經濟ではなくして、一般的交易經濟である。従つて中世の差別的、統制的社會は維持し難く、近世の自由的、平等的社會が生じた。社會の制規は身分に依らずして、契約に基くことになつた。中世に於いては生活の基礎たる農業が尊重され、近世にあつては營利の基本たる商業が重要視されたのである。(1)

今英國資本主義の成立過程を明かにするためには、先づ英國に於ける近世的要素を過去に溯つて検討して見る必要がある。英國に於いて貨幣とか、資本とか、商業とか云ふ交易社會の諸要素が中世に於いて如何なる状態にあつたか、又その發展の傾向が如何であつたか等を明白にする必要がある。

さらに一國の社會的變化はその國の經濟的變化から生ずるものではあるが、その變化がその國自體の内部的原因

に基く部分と外部からの影響に依る部分とがある。英國の近世的經濟發展がその何れに依存すること大であるかを明かにするためにも、上述せる分析を行ふことは必要である。以上の理由から私は自分の英國經濟史研究の目標を先づその近世以前の經濟状態に於ける都市に置いたのであつた。(2)

(1) 中世を自給自足の社會とするも、中世に於ける流通社會を否定するのではない。むしろ中世の内に多くの近世社會の萌芽を認める。Dopschの指摘するが如く、「Wir konnten an der Hand der historischen Tatsachen verfolgen, dass Natural- und Geldwirtschaft nicht zeitlich aufeinanderfolgende Wirtschaftsformen sind, sondern nebeneinander vorkommen, ohne dass die eine als Zeugnis primitiver, die andere als spezifischer Ausdruck höherer Kultur zu werten wäre. Auch der Geldkapitalismus neuerer Zeit bedient sich der Naturalwirtschaft zur Erzielung höherer Gewinne, anderseits dauert diese auch bei den Grossgrundherrschaften bis in die Gegenwart hinein fort.» (Alfons Dopsch, Naturalwirtschaft und Geldwirtschaft in der Weltgeschichte, S. 253) 上の事實は十分認められる。しかし中世に於ける指導理念は近世と異なり上述の如く消費に基礎を置く關係から貨幣經濟に對する判斷並びに政策を異にする。しかし現代に於ける經濟的 Autarkie の要求は、ことに再び中世の理念の檢討並びに近世的經濟組織の批判を必要とするに至つたのである。なほ「近世」と云ふ意義については拙著「近世經濟史概論」第一章第三節を参照されたい。

(2) 都市を特に商業的と見る所以は都市の本質を一般に次ぎの如く規定するに基くものである。「eine Stadt im ökonomischen Sinne ist eine grössere Ansiedlung von Menschen, die für ihren Unterhalt auf die Erzeugnisse fremder landwirtschaftlicher Arbeit angewiesen ist.» (Werner Sombart, Der Moderne Kapitalismus, III Auflage, Erster Band, S. 128). «Vielmehr ist vom wirtschaftlichen Standpunkt aus angesehen, innerhalb wie ausserhalb des Okzidents die Stadt zunächst Sitz

von „Handel und Gewerbe und Bedarf kontinuierlicher Lebensmittelzufuhr von aussenhalb.“ (Max Weber, Wirtschaftsgeschichte, SS: 272-3)

二

近世資本主義制度の本質を明かならしむる上に、先づ英國を對象とすることは多くの理由を有する。英國に於ける資本主義制度の發達が主として英國自體の經濟的發展から必然的に生じたものであり、又他の國々に先立つてなされたものであつたから、往々にして資本主義制度發達の最も典型的なものとされ、従つて資本主義そのものの批判、分析に英國を對象とすることが最も適當と考へられがちである。しかし英國の資本主義的發展が如何に典型的であるとしても、その形成の過程を以つて直ちに「資本主義一般」と同一視することは出来ない。

英國に於ける資本主義生成の過程が如何に典型的であるとしても、なほそこに英國に於ける特殊の事情がその發展を條件づけてゐることを認めざるを得ない。それ等の例は甚だ多く指摘することが出来るであらう。例へばその資本主義的生産形態が先づ綿織物業に最初に發生したるが如きも、英國の特殊の産業事情と歐羅巴に於ける特殊の流行とが一致したと云ふ個別的事象に基けるものである。(3) 又英國に於ける貿易會社の「Joint Stock」が矢張り英國的組織であり、それが英國特有の發展過程を経て、近世の株式會社組織となつたものである。(4) 従つて英國資本主義成立の過程には多くの英國特有の事情の存することを認めなければならぬ。

近世資本主義成立の上に最も必要な條件の一つとして、その國民の政治的統一が考へられる。この點に於いても英

國に特殊の事情の存してゐたことを認めざるを得ない。紀元一〇六六年佛蘭西から海を越えてノルマン人が侵入して來た後、即ちノルマン人の征服以後、約二世紀の間は全く外國貴族が完全に英國を統治してゐた。従つてこの間の英國史は純粹の英國人たるアングロ・サクソン民族の歴史ではなく、佛蘭西出身の國王と諸侯との記録である。純粹の英國人諸侯の最後の一人であつた Waltheof 愛國者たる Hereward の後、暫くの間は英國史上に英國人名を發見し得なくなつた。英語は地方百姓の方言となつた。語るには佛蘭西語を以つてし、書するには羅旬語を使用した。當時の英國はノルマン文明の支配下にあつたのである。かくノルマン貴族に依つて完全に壓迫されてゐたアングロ・サクソン民族は隸農(Villein)として、政治上に於いては云ふまでもなく、宗教上に於いても何等の權利をも認められてゐなかつた。唯社會組織を形成する上に、多數の農民階級として重要な意義を有してゐたことは否定出來ない。故に英國國民の結成にはこれ等純粹英國々民の自覺を促進し、外國貴族の治下にある封建的束縛を脱却する必要があつたのである。(5)

中世を通じてこれ等英國國民の發展が跡づけ得られる。彼等の一部はその隸農的地位を次第に脱却して市民階級に發展して行つた。純然たる中世社會にあつては隸農たる身分を脱することは頗る困難である。しかし歐洲大陸との交通——殊に十字軍戰役後に於ける北歐の經濟的發展の影響——人口の増加、欲望の増大並びに複雑化、貴族階級の生活の向上と奢侈の増大、これ等は一方農村を商業化すると共に、他方都市の勢力を増大せしめた。即ち商業の發展に依つて、土地その他の不動産よりも貨幣の方が重要視され、それに依つて富を形成し、土地に基礎を置く舊

勢力、即ち封建的勢力を破壊し、動産所有者たる商工階級の勃興を見た。そしてそれが英國にあつては同時に英國民の外國出身の貴族に對する勝利であり、又同時に國民的結成の完成であつたのである。その活躍の基礎となり、又舞臺となつたのは都市である。この意味に於いて英國資本主義の成立過程を明かにするためには、單に都市の商業要素と云ふ理由からばかりではなく、英國民の民族的上昇を明かにするためにも、都市の研究が特に重要視さるべきものであると考へる。従つて先づ次に英國中世都市の分析を試みよう。

(3) 抽稿、英國綿業の發達と商業(本誌第二十四卷第六號所載)參照。

(4) Jointstock company について W. R. Scott の名著 "The Constitution and Finance of English, Scottish and Irish Joint-Stock Companies to 1720", 3 vols. があるが、現代の株式會社との聯關はなされてゐない。一八四四年の Joint Stock Companies Act 以後については G. Toled, "Some Aspects of Joint Stock Companies, 1844-1930" (The Economic History Review, Vol. IV, No. 1.) 等があるが、會社形態の發展を十分説明してはゐない。最近大塚久雄氏がこの方面の研究を發表されてゐる。株式會社發生前史の一編(「經濟志林」第九卷第二號)「英吉利に於ける初期鑛山會社」(「社會經濟史學」第五卷第七號)等である。しかし未だ完成せられたものではない。H. A. Shannon, "The Coming of General Limited Liability" (The Economic Journal, Economic History, vol. II, No. 6) は簡單である。かつ法制史的ではあるが、一應の跡づけはなされてゐる。

(5) 拙著「英國經濟史概論」第二章參照。

三

英國に於ける都市の發生並びに發達に關するもので、私がすでに公にした論文は次ぎの如くである。(6)

「古代英國都市概論」(拙著「英國資本主義成立史」改題所載)

「英國都市起源考」(同上)

「中世英國都市研究資料」(同上)

「Ricart's Kalendar 1250」(同上)

「Liber Albus に現はれたるロンドンの經濟生活」(同上)

「ロンドンに於けるハンザの Steelyard」(同上)

「Piers the Plowman を通じて見たる英國の社會狀態」(同上)

「英蘭徒弟制度の變遷」(同上)

以上の著作を通じて明かにせんと欲したことは、英國都市の本質が如何なるものであり、又その發達が如何なる傾向にあつたかと云ふことである。上述の如く中世社會は本質的には消費を中心とするものであるから、都市と雖もその觀念に支配されるのは當然である。初期の英國都市が所謂「半都市」とも云ふべきものであり、完全な「都市」の概念に相應するものでなかつたことは當然である。(7) しかし英國の都市の起源に於いては、明かに商業的要素が重要な地位を占め、その發達が英國資本主義成立に大なる役割を演じたことは否定し得ない。

故に、かくの如く英國中世都市の本質が商業に依存することは、概括的に云へば、多くの他の國々の都市の發達と同様である。しかし特に英國に於いてこれ等の都市の勃興が重要な意味を有する所以は、それ等の市民が本來

の英國民なるが故である。アングロ・サクソン民族の都市に於ける商業的活躍は中世都市の發達を生み、一方納税に基く代表者を議會に送ることに依つて政治的権限を得、他方漸次に増大せる資本の蓄積に依つて經濟的優勢に到達したと結論したのである。(8) しかし大なる資本の蓄積は必ずしも多數の市民階級に依つて成就されたのではな

都市を中心として形成された地方的團體、即ちギルドは英國人から成立つてゐた。従つて彼等の法律上の身分は單なる隸農に過ぎなかつた。然るに主として國王、諸侯等の財政的必要は彼等をして漸次に都市の自由民たらしめた。殊に國王が封建諸侯の勢力を打破せんとして市民階級と結合した。リチャード一世やジョン王の時代に多くの特許狀(Charter)が都市に與へられた。否與へられたと云ふよりもむしろ賣られたと云ふ方が適當であらう。かくして、商工階級は地方政治に對する自治的訓練の機會が與へられた。さらに市民は單に地方政治上に有力なる分子として活躍するのみならず、進んで中央の政界にその活動範圍を擴張して來た。殊に中央政府が外交に、内治に幾多の仕事を行ふに至るや、益々資金を必要とし、多くの租税を徵集するの止むなきに至つた。従つてその徵税の範圍を擴大しなければならなかつた。從來土地が租税の基礎をなしてゐた間は、地主のみが議會に代表者を出してゐた。然るにヘンリー二世以後、動産にも課税するやうになると、動産所有者もこれに参加するに至つた。何故ならば代表者なくば課税されぬ(No taxation without representation)のが原則であつたからである。一二六五年に英國市民が始めて議會に現れ、又公文書中に英語が使用されるやうになつたのである。

かく市民の政治的進出は中世後半に益々顯著となつた。しかし近世に於ける國民的商業の發展、並びに産業革命を可能ならしめた資本の蓄積は必ずしもこれ等の都市の市民階級に依つて行はれたのではない。これ等の都市の商人や職人の利益は、よしんば大なる暴利を貪ほつてゐたとしても、甚だ僅少なものであつた。中世の普通の商人が一年間に資本を倍加し得るが如きは極端に好況の場合であつた。普通の場合に於いては資本の蓄積をなさず、その職業から得た利益は彼、及びその家族を維持するに足るを原則とする。中世ギルドの規定は組合員の生活の支持を目標として作られたものであつて、末期に現れたやうな獨占排他的な機關たることを本旨としたものではない。その警察的機能や相互扶助の機能等は何れも右の意味に於いて道徳的重要性を有してゐたのである。(9)

このギルドの地方團體的特質は中世の生産組織を「註文生産」なる語を以つて説明することになる。この言葉は必ずしも中世の生産組織を全體的に説明するものではないが、所謂近世の「市場生産」に對するものとして承認し得る。中世英國の商工業者がその事業の對象を地方的に局限し、對外市場は一に外國商人に一任してゐたから、彼等の經濟的知識の程度はかなり低いものであつた。この點は上掲のロンドンに關する二つの紹介に依つても十分に覗はれる。そこには著しい中世的統制が行はれてゐた。ロンドンシの如き國際的都市にして然り。況んや他の地方都市に於いては二層中世的色彩が濃厚である。

しかし他方に於いてこの時代にすでに營利的精神の發露がは覗れる。「Piers Plowman」に現れた「最初の不平は從來存してゐたところの階級的秩序が破壊されてゆくこと」であり、「國王や貴族、又は教會さへも、動産的富の前

に容易に屈服してゆくこと」であつた。その動産的富の尊重は彼等をして益々營利的ならしめた。「中世に於けるマナアの領主達はその領土から出来る産物を以つて彼等自身貿易に従事し、それで得た金で市又は市場に於いて彼等の必要な品物を購求する。貴族、司教、否國王さへも第十四世紀及び第十五世紀には船舶を所有し、その召使を乗組ませ、外國と貿易を開き、多くの利益を得てゐた。」(10)かくの如き營利的精神はかなり高度に發達してゐたと思はれる。

さらに同じく中世的組織の破壊を徒弟制度の變遷の中にも發見出来る。徒弟制度はエリザベス第五年の條令に依つて條令化され、一八一四年に廢止された。この廢止は自由放任主義の歴史上に一區劃をなすものとされてゐる。(11)しかし一八一三年の後までこの制度が存してゐたとしても、一五六三年以降に於いては最早實際的效果の少ないものであり、かつ中世的意義の失はれたものであつた。要するに「初期に於いては徒弟制度は工匠にとつて必ずなさねばならぬ必要階梯ではなかつた」が、技術の複雑化と共に、「中頃にして必須の經路となり、以つて一部親方のためにその職業獨占の手段となつた」。技術習得の機關であつたものが、親方の利益擁護のために利用されるやうになり、「最後に一轉して國內に於ける産業統制の用に供せられたのである」。即ち徒弟制度が發展するにつれて、親方と徒弟との個人的關係は稀薄となり、家族的親密さを失ひ、一種の權利義務の關係に移つて行つたのである。(12)そして漸次に中世的調和を失なつてしまつたのである。

都市に於ける中世的色彩の衰頹と共に、都市は近世的な變化を受けて來たのであるが、中世の市民階級それ自身がすべて資本家的發展を遂げたわけではない。勿論彼等のある者は資本家的發展をなした。しかし永く中世的地位に止まつてゐた職人階級もあれば、又労働者群に入込んだ者もある。(13)換言すれば中世に勃興して來た商工業者は明かに近世社會に於ける中心的役割をなしてはゐるが、決して大資本の蒐集を團體的に行なつてゐたわけではない。又それは當時に於いて不可能事であつた。故に英國に於ける資本の蓄積はさらにこれを他の方面から觀察しなければならぬのである。

(6) 私が上記の論稿を發表した後には、中世都市に関する幾多の資料や著作が公にされてゐる。今は管見の及べる幾つかを次に列記するに止めて置く。

Stella Kramer, *The English Craft Guilds, studies in their Progress and Decline*, 1927. (『三田學會雜誌』第二十一卷第十二

號紹介参照)

Wray Hunt, *Growth and Development of The English Town*, 1931.

M. Dorothy George, *England in Transition*, 1931.

Eileen Power and M. M. Postan (ed.), *Studies in English Trade in the Fifteenth Century*, 1933.

Frances Condit, *The London Weavers' Company*, vol. I, 1933.

(以上四種「三田學會雜誌」第二十七卷第七號紹介参照)

Adolphus Ballard and James Tait (ed.), *British Borough Charters 1216-1307*, 1923.

A. H. Thomas, *Calendar of Plea and Memoranda Rolls of the City of London, 1364-1381*, 1929.

E. W. W. Vale, *The Great Red Book of Bristol*.

(7) 中世都市内ばかりの明地がめいとなつたこと、それ等が「一般公衆に使用されてゐたこと等に依つても中世都市の状態を推

脚十ニ出たといふ。それ等の私有地化して行つたといふのと、將市部區の團體が其のたゞ。Barbara Hammond, "Two Towns' Enclosures" (The Economic Journal, Economic History, vol. II, No. 6) 參照。

(8) 拙著「英國資本主義成立史」一九二一—三頁。

(9) 中世初期に於けるギルドの精神が合一體の觀念から出た相互扶助であつたことは認めざるを得ない。即ち Otto Gierke の言が如く、"Medieval Thought proceeded from the idea of a single Whole. Therefore an organic construction of Human Society was as familiar to it as a mechanical and atomistic construction was originally alien." 又「..... on the one side that the Member is but part of a Whole, that the Whole is independent of the changes in its parts, that in case of collision the welfare of the Member must be sacrificed to that of the Body; and on the other side, that the Whole only lives and comes to light in the Members, that every Member is of value to the Whole, and that even a justifiable amputation of a Member, however insignificant, is always a regrettable operation which gives pain to the Whole." ("Political Theories of the Middle Age," trans. by F. W. Maitland, pp. 22, 27.) 又「中世思想がギルドに關聯するものは、その本質が、古代の世界主義との關係を以ては説かない。唯同思想がギルド形成にも、又中世都府形成にも大なる影響のあつたことを認めるだけである。そのギルドが經濟的發展に従つて獨占團體に發展して行つたのである。なほ本位田祥男「中世の統一的世界觀の經濟生活に於ける表現」(同氏著「經濟史研究」收録)、金子鷹之助著「イヒスとイロ」(上田辰之助「社會經濟史」に於ける中世紀の再認識)、「社會經濟史學」第五卷第十號所載等參照。

(10) 拙著「英國資本主義成立史」三三五—三五五頁。

(11) J. K. Derry は一八一四年に於ける徒弟條令廢止が、かく容易に急速に廢止せられた理由に「.....次ぎの如く云ふ。

"The commonly accepted theory is that the fabric of law was shaken, first by the free trade doctrines promulgated by Adam Smith, and second by the repeal of the statute in relation to the woollen industry and wages, and that the series

of events arising out of the prosecutions of 1809-12 merely added the final thrust. None of this can be said to be untrue, but in attempting to determine the relative importance of different causes, it seems pertinent to remark that the economic doctrines, already a century old, were not particularly emphasized in the debates, and to observe that the case of the woollen industry was sparingly, the repeal of the wage-clauses of the statute never, cited as argument. *Laissez-faire* was, no doubt, bound to triumph in the end, but the actual circumstances under which this part of the old system came to be overthrown require some additional explanation." かくて彼は政治的見地から見てこの法制が存置し得なかつた理由を續々説明してゐる。("The Repeal of the Apprenticeship Clauses of the Statutes of Apprentices," The Economic History Review, Vol. III, No. 1) しかし徒弟條令そのものが、すでにその設置の最初から十分な効果を擧げてなかつたことに想到すれば、上述の如き議論が如何に表面的事實に捕はれた議論であるかを解る。

(12) 「英國資本主義成立史」三六九—七〇、三八五頁

(13) George Unwin, "Industrial Organization in the Sixteenth and Seventeenth Century," p. 13. に初期ギルドの工匠が資本家労働者その他に變化してゆく過程を巧みに要領よく圖示してゐる。參照されたい。その圖に多少の變化、省略をなして、拙稿「英國に於ける労働者階級の發生」(「三田學會雜誌」第二十三卷第一號所載)に載せてある。

四

市民階級の活躍と共に問題となつたのは資本である。英國に於いて初期に資本の蓄積をなした者はその個人的才能と運命とに依つて成就した。その例は極めて多し。(14) しかしそれ等の中でも殊に王室又は諸侯に對して財政的關係を有してゐた者が最も多く資本蓄積の機會が與へられてゐた。又さらに中世末に行はれ始めた海外貿易事業が

彼等の資本の増加を大ならしむるに役立つたのである。

今この資本蓄積の過程を出来る限り簡単に述べて見ると、次ぎの如くなる。農村に於ける自給主義が破れると共に、都市に於ける商工業者の勃興となり、又従つて貨幣使用が漸次に普通の現象となつて来た。しかし英國自體の資本の蓄積は決して大なるものではなかつた。勿論貴族階級が一方その奢侈と軍備とのために、多くの浪費をなすと共に、他方に於いて彼等自身營利的に資本を投下して漸次に資本の増殖を計つたことは否定し得ない。例へば第十六世紀に於いて、最も多くの資本を要する製鐵業が大部分貴族階級に依つて經營されてゐた事實に依つても覗ひ知ることが出来よう。又初期鑛山會社の如きも擧げられよう。しかし資本が豊富であつたわけではない。當時に於いて英國は資本の不足と技術の未熟とに悩んでゐたのである。(15) 又貴族階級がその奢侈的生活に浪費した部分は、それ等の奢侈品が貴金屬とか織物とか香料とか云ふ外國産の商品であつたから、對外貿易に従事する商業階級の特種の發展を刺戟したことは明かである。さらに彼等が軍備に消耗する貨幣が多くの軍事關係の工業を刺戟したことも否定出来ない。

然らば貴族階級が何處からそれ等の資金を獲得して来たか。その領土から得られる収入——貢租、地代、小作料、又は羊毛販賣等から得た利得等も決して少なくはない。(16) しかしそれだけでは未だ彼等の諸支出を十分に満たすことは出来ない。その不足額は第一に借金政策に依つて補はれた。第十三世紀の早きすでに借金政策は英國の貴族の常套手段となつてゐたやうである。始めはカオル人(Caroline)又は(Caorin)に依つて供給された。カオル人と

云ふのは、英國では南佛蘭西から来た商人又時には伊太利人にさへこれを適用した。彼等はヘンリー三世に依つて追放されたが、これ等の高利貸は絶えず必要であつたから、直ぐ復活し、増加してゐる。カオル人に次いで、第十四世紀にはロムバード人、又ユダヤ人が高利資金の提供者となり、さらに伊太利の商人やハンザの商人がそれ等の後継者として現れて來てゐる。第二に資金の不足を補ふ手段として悪貨の流通が行はれた。(17) 又國家財政を補ふ手段として、ずつと後期第十七世紀末ではあるが富籤公債(Tonges)が重要な役割を演じてゐた。(18) しかし何れにしても王室、貴族共に主として借金政策に依り資金を蒐集するより外なかつたのである。

かくして得たる資金はその大部分が軍事費や奢侈費に費消された結果、國內の産業資本として再び役立つことが少なく、財政は破綻せざるを得なかつた。一三三九年の英國王室の破産の如きは、かうした状態が行詰つた結果に外ならない。これを切抜けんがためには、國內に勃興して來た商人階級に特權を與へて資金を調達するか、又は外國商人に貿易上の特權を賦與して融通を受けるか、その一を選ぶより外にない。従つて外國貿易は益々外國人の手に獨占される傾向とならざるを得なかつた。第十六世紀に於いて英國の經濟状態は決して樂觀すべきものではなかつたのである。

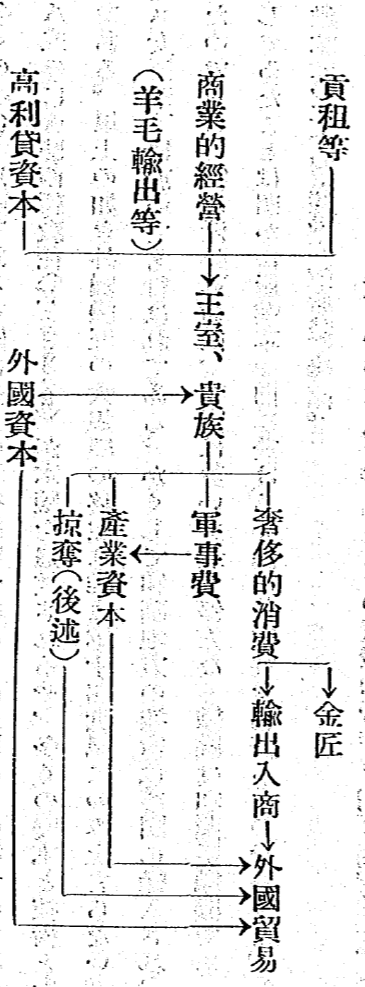
かゝる状態にあつて、中央政府としてなされるべきことは、(一)國內に於いて重要な金融機關を確立すること、(二)對外商業を自國人の手に於いて行ふこと、(三)産業、殊に鑛山業、漁業等の事業を盛んならしむることが必要であつた。エリザベス朝に於いて中央集權が確立せらるゝや、これ等の事業が眞面目に考慮せられ始めた。(19)

しかしこれ等の事業を行ふには資本が必要であつた。その外その後に行はれた少しく大なる事業には常に國內資本だけでは足りなかつた。例へば第十七世紀初期に行はれた沼澤地方の排水事業にせよ、又一六一四年東印度會社が最初の合資(Joint Stock)制度を採用するに當つても、又一六六六年の大火災後、ロンドン復興事業にさへも、外國資本の援助を仰がなければならなかつたのである。それ等の資金は初期に於いて獨逸資本もあつたが、後には殆どすべて和蘭の供給するところであつた。従つて英國はその國內産業の開發に際し、第十八世紀の中頃まで、大いに外國資本の吸収に努めたのであつた。(20) 一七六〇年頃、和蘭人は英蘭銀行及び東印度會社の株の外に、英國債を約二千萬磅所有してゐたと云はれてゐる。(21)

以上は財政上の問題と關聯して、國家資本の形態を採つたものであるが、(22) 他方に於いて商業階級に於いても資本の蓄積が行はれてゐた。それは主として舶來品を取扱ふ商人及び貴金屬の職人等が先づ貴族階級の浪費から利益を得てゐた。従つて輸入雜貨商とか、絹物商とか、金匠とか、資本の蓄積を行なつてゐた。中にも金匠(Goldsmith)の如きは金融業を始め、後の銀行業の先驅を勤めた。ある意味に於いてこれ等が英國に於ける純粹の國內資本の蓄積と見做し得るから、特に「英國に於ける銀行業の發生」(「史學」第八卷第四號所載)と題して金匠に論及して置いたから参照されたい。

しかし英國にとつて最も重要なことは、外國貿易を自國人の手に收めることであつた。又これが完成されざる限り、英國は外國資本の重壓の下に苦しまざるを得ない。そののみならず産業革命を行なつて、最初の資本主義國た

る地位を得ることは困難であつたらう。今以上述べて來た資本の變遷を圖示すると次ぎの如くなる。



以上の如き状態にあつたから、第十六世紀以降、經濟問題——殊に貨幣、金融、資本、貿易の問題が國家財政と關聯して頗る重要になつて來たのである。(23) 外國資本の流入が無制限に許される筈はなく、一方新しき財源を發見する必要があり、他方從來の負擔を返済し、國內資本を潤澤ならしむる必要がある。英國は第十八世紀の中頃からすでに漸次に投資國に變じつゝあつた。この問題を解決し、同時に英國の資本主義を完成せしめたのは對外商業の發展であつたのである。

(14) この種の例は頗る多く、例へば Peter Buntell は貧家に生れ、使屋となつて勤儉努力して小資本を蓄積した。それを元として毛布商となり、一六〇二年その死するに際して約四萬磅の資産を残した。最近公にされた Lucy Starr Sutherland の "A London Merchant, 1685-1774" は紹介されてゐる Brand 家と北 Devon の自由農民の出身で産をなした者である。

る。拙稿「初期資本家形態としての「Cotter」」(「社會經濟史學」第一卷第一號所載)参照。

(16) 資本については後述するが、技術についても英國はあらゆる方面に於いて後れでゐたと云つても過言ではない。單に鑛山技術ばかりでなく、毛織物業の如きに於いても然りである。勿論外國織匠の渡來する以前に於いても、相當の機械業はあつた。例へば梳毛織(Worsted)製造業はノフォークに於いても相當大なる發展を示してゐたやうである。しかし英國の織物業に劃時的な改革が行はれるやうになつたのは、やはり外國織匠の移住以後である。エドワード三世の政府は明かにこれを認め外國織匠を歓迎した。他方又それ等の熟練せる織匠の住居せる低地諸邦、殊にフランダース地方の状態は一三三〇年頃にすでに甚しい不安な政治状態に陥つてゐた。一三二八年カッセルに於いて、フランダースの織匠はその領主と争つて破れ、次いでギルドに反對する嚴酷な政策、並びに大都市——ガン、ブルージュ及びイブル——に於ける織匠追放の事件等に依り、勢ひ他邦に移住せざるを得ない状態にあつたのである。この大陸に於ける政治的、又は軍事的不安が、多くの場合、島國である英國に多大の利益を與へたことは、單にこの第十四世紀の場合ばかりではなかつた。例へば一六八五年に佛蘭西新教徒(Huguenots)が本國を追放されるや、多くの資本と技術とを携へて英國に移住せる場合もその一つである。以上の如き外國織匠の大規模の移住は唯に第十四世紀にのみ止まらない。第十六世紀——一五四四年、エリザベス女王治下に於いても行はれてゐる。かくして和蘭地方の技術は英國に輸入され、英國の毛織物は漸次に改善されて行つたのである。實に産業革命前、英國に於いて最も優秀なる織機は和蘭手織機であつたのである。かく資本及び技術に缺如してゐたことは明かに産業革命前に於ける英國の後進性を物語るものであつた。(拙稿「英國綿業の發達と商業」三田學會雜誌「第二十四卷第六號所載」参照。

(16) 貴族地主階級の財政について A. E. Levett の實證的勞作「The Financial Organization of the Manor」(The Economic History Review, Vol. I, No. 1) があつた。又一村にいつてゐるが、精細に農村の經濟生活を描寫して、七百頁餘

の大冊をなした勞作は Norman S. B. Gras and Ethel C. Gras の共著「The Economic and Social History of an English Village (Crawley, Hampshire) 909-1928」が有名。その領主の收入を四期に分けて次をの如く述べてゐる。「First, there was the pre-manorial period, during which the lord received probably only rents in kind. About this we know nothing specifically. Secondly, there was the manorial period (from Anglo-Saxon times to 1448), during which the lord received not only rents in money and in kind but services on the home farm, from which profits were derived. The third period extended from the early fifteenth century to the nineteenth, during which the lord was once again (largely) a rent taker and the collector of payments connected with such jurisdictional rights as could be enforced. Then, fourthly, the value of the demesne and of the rights over tenants' lands were transferred into money in the nineteenth century, whereupon the lord became practically a taker of interest and dividends.」(pp. 84-5.)

(17) “Elizabeth on her accession found in circulation some £900,000 of debased silver money. She borrowed from Antwerp 200,000 crowns of pure silver.” (Christopher Hollis, “The Two Nations, A Financial Study of English History,” p. 7) かへしてキッキンズは一五六〇年九月二十七日善良なる貨幣の規定書を發布したのを述べた。

(18) R. D. Richards 氏の Lottery の財政上使用された種類を四つに分けて次をの如く述べてゐる。

- “1. Lotteries for facilitating the raising of State-loans.
- “2. Lotteries for reducing the capital of, or interest on, the National Debt.
- “3. Lotteries for raising money for projects not connected with the supply or debt service.
- “4. Lotteries for raising money as revenue.”

(C. The Lottery in English Government Finance.” The Economic Journal, Economic History, Vol. III, No. 9, p. 58).

(19) エリザベス朝に於けるこの種の事業については、Cunningham がその大著 "Growth" の中に詳細に論じてゐるが、要領よく説明してゐるのは "The Progress of Capitalism in England," pp. 79 ff. である。この書は本論文と同一問題を取扱つたものであるが、彼は英國資本主義の発展を英國自身の力に基くものとして英國經濟の内部的發展を甚だ巧みに描寫してゐる。しかし英國の産業革命以前に於ける後進性 (Backwardness) については殆ど説明しない。英國の内部的發展力は勿論否定し得ないが、英國資本主義の生成がそれよりもむしろ外部的影響に依ると考へる。そこに英國の近世に於ける商業的發展の重要性があることは、本論に於いて説明せる如くである。

(20) エリザベス以後の鞏固なる中央政府に依る財政の確立はこれ等外國資本の吸収に大いに與つて力がある。しかしその財政改革が Ehrenberg の云々が如く英國の經濟状態を直ちに良好にしたとは考へられなかつた。"Während die Finanzwirtschaft Spaniens und Frankreichs bis an die Schwelle der Neuzeit noch einen mittelalterlichen Charakter hatte, war in England schon im 16. Jahrhundert ein erfolgreicher Versuch gemacht worden, das Finanzwesen von Grund auf zu reformieren. Gresham hatte ihm einen streng nationalen Charakter gegeben und hatte zugleich sich bemüht, es mit den kaufmännischen Grundstücken der Ehrlichkeit, der Ordnung und der Sparsamkeit zu durchdringen. Dies war in bemerkenswerthem Grade gelungen: die ausländischen Geldleiher verschwanden allmählich aus England, dessen Kapitalreichtum sich in manchen schwierigen Lagen an sich als ausreichend erwies, um die Geldbedürfnisse der Krone befriedigen;..." ("Das Zeitalter der Fugge," Zweiter Band, S. 275) けれどもその単純なる解釋である。次ぎの註にもあるやうに英國は容易に外國資本から脱却し得たのではない。

(21) E. Lipson, "The Economic History of England," vol. III, p. 212. 本文掲載の例の外に次ぎの如く云つてゐる。
 "After the Restoration it was stated that a great part of the money used in trade and for the rebuilding of London was Dutch money. As regards the amount of foreign money invested in England, a parliamentary committee was informed in 1669 that 'Alderman Bucknell had above £ 100,000 in his hands, Mr. Meynell above £ 30,000, Mr. Vandeput at one time £ 60,000, Mr. Dericost always near £ 200,000 of Dutch money, lent to merchants at 7, 6 and 5 percent', when money was at 8 percent." 一六六九年と云へばすでに英國の對外商業は和蘭と競争してゐる頃である。しかもなほ外國資本のインフレーションが見られる。これを以つて前註の Ehrenberg の所説が表面的なものであることは明かである。

(22) 金融事業と貿易事業とをすべて財政と相關聯して行はれてゐるのが、この時代の特徴である。英蘭銀行の設立が財政間種と密接な關係のあること、南海會社も同様であることは、あまりにも有名である。拙稿「産業革命前に於ける英國社會状態概論」(「三田學會雜誌」第二十二卷第八號所載)参照。

(23) この時代を含む貨幣金融等に關する研究がかなり近頃發表される。今私の寓目せるもののみを次ぎに掲げて置く。

W. Marston Acre, The Bank of England from Within, 1694-1900, 2 vols, 1931.

R. D. Richards, The Early History of Banking in England, 1929.

Percy Ripley, A Short History of Investment, 1934.

C. Hollis, The Two Nations. A Financial Study of English History, 1935.

M. P. Ashley, Financial and Commercial Policy under the Cromwellian Protectorate, 1934.

A. E. Feavearyear, The Pound Sterling, 1931.

R. H. Mottram, A History of Financial Speculation, 1923.

雜誌論文には多く特殊の題目を取扱つたものが見られるが、重要なものは上記の註の中に引用したから略して置く。

五

商人階級の發展並びに外國貿易經營の變化と共に、商業に對する中世的觀念は一掃された。しかしこの經過は急激に起つたものではない。事實の變遷が漸次に變化せしめたのであつた。中世に於ける都市中心——都市の自給自足的傾向——の生活は、それ等の市民をして外國人と他の英國都市の市民との間に差別を置かず、その市民以外の者はすべてこれを外國人として取扱つた。その都市の商業はその市民に依つて獨占されてゐた。他の都市の者は外國人と同様、一定の制限の下に立ち、市場税等を支拂はなければならなかつた。この傾向は先づ最初に都市相互の交易の増大に依つて破られた。例へば一二六五年に於けるウィンチェスターとサザムプトンとの商業條約の如きがそれである。(24) 他方商人の信用状態は次第に向上し、かくして漸次に國內商業に於ける統一が始まり、チードル朝の國民的政策に依つて一層この傾向が高められた。(25)

この傾向はさらにより有利なる外國貿易を英國人の手に收めることに努力するやうにした。當時最も重要な輸出品は羊毛であつた。その外は羊皮、柔皮、錫及び鉛等に過ぎない。しかも第十三世紀の中頃まではこれ等の輸出殆ど全部が外國商人の手にあつた。従つて英國商人の得る利益は僅少なからざるを得ない。殊に彼等の間に何等の團體も組織もなかつたから、動もすれば羊毛を安價に外國商人に購入される恐れがあつた。然るに羊毛生産は單に商人階級だけの問題ではなく、貴族階級の利害と最も密接に關係づけられてゐる。そこで羊毛輸出の統制機關として Staple が特殊の意義を有することになる。Staple の組織が出來上ることに依つて、一方支配階級の利益を擁護す

ると共に、他方ステュールの商人 (Stewards) に——又従つて英國商人に、組織的行爲の有利なることを教へ、對外的觀念を明確にするに役立つたのである。(26) 第十五世紀末(一四七九—八二)に於てすでに Merchant Adventurers の驚くべき進出を見るに至つたのである。(27) さらにかくの如き早期的進出はエリザベス朝に至つて、前述せる國民政策と相伴なつて貿易特許會社の發展の準備階梯となつたのである。(28)

この英國自身の發展傾向は折柄歐洲、殊に北歐諸國の商業の著しい進展と相俟つものである。こゝに外部的發展要素のかなり強かつたことを容認しなければならぬ。

元來北歐は南歐に比して、その經濟的進歩が著しく後れてゐた。従つてその資本關係の如きも常に南歐、殊に伊太利都市に依頼しなければならなかつた。北歐の經濟的獨立は中世末から暫く行はれてゐたが、新大陸發見以前に於いては未だ十分の成功を見るに至らなかつた。新大陸發見以後、北歐諸國の發展には著しい變化を生じた。北歐の商權を掌握してゐたハンザ同盟の勢力が失墜して、國民的國家の形成に基く近世的商業の發生を見るに至つたのである。

北歐に於ける銀山の採掘、西班牙に依る新大陸からの金銀の流入(29)——これ等が相次いで起つたために、歐洲に於ける金銀増加は頗る著しかつた。かうした金銀の増加が歐洲の經濟界に及ぼした影響は極めて明瞭である。金銀インフレーションに基く物價の騰貴は、すでに市場の擴大に依つて多少とも上向の傾向のあつた物價を、さらに一層引上げた。即ち未曾有の好景氣時代を現出したのであつた。かうした好景氣が歐洲の產業界を刺戟し、經濟組

織並びに生産技術の改善を要求するに至るのは當然である。殊に直接金銀の輸入國たる西班牙は徒らに金銀の流入から生じた好景氣に浮かれて、自國を他國の好市場たらしめたに過ぎないから、西班牙に流入した金銀は直ちに諸生産國に流出して、それ等の國々の産業を刺戟した。(30)

歐洲に於ける金銀の増加は勿論英國にも影響せざるを得なかつた。しかしすでに指摘したやうに英國の産業は頗る後れてゐた。エリザベス女王時代に於いて、當時の歐洲に於ける一般的潮流に影響され、又軍備その他の中央政府的設備を充實する必要から、國內に於ける金、銀、銅、水銀等を採掘するために、*Mines Royal Society, Society of Mineral and Battery Work* 等を設置し、又他方對外商業發展のために幾多の貿易會社を設立した。しかしそれ等は初期に於いては何れも成功しなかつた。殊に國內鑛山の開發は國家の大なる援助にも拘らず、意の如き成績を擧げることが出来なかつた。むしろ英國は貿易會社その他の手段に依り、外國の金銀を取入れ、國內資本を潤澤にすることが、目前に最も必要視せらるゝところであつた。かくして貿易會社に幾多の國家的援助が與へられたのみならず、外國船を襲撃して金銀を掠奪するやうな海賊的行爲さへも敢て保護獎勵が與へられたのであつた。

従つて英國資本主義の成否は一にこれ等の對外商業政策が成功するか否かにあつたのである。この海外商業の問題について、私の公けにした諸論稿は次ぎの如くである。(31)

「近世商業發展の意義」(拙著「英國資本主義成立史」収録)

「近世初期英葡通商關係と Methuen 條約」(同上改題収録)

「第十七世紀前半に於ける英國東印度會社の状態」(同上)

「英國東印度會社の發展時代」(同上)

「一七六三年の巴里條約について」(同上)

「英國阿弗利加會社と黒奴貿易」(福田博士追憶論文集「經濟學研究」所載)

その國內産業に及ぼした影響については、

「初期資本家形態としての *Charter*」(「社會經濟史學」第一卷第一號所載)

「英國綿業の發達と商業」(「三田學會雜誌」第二十四卷第六號所載)

英國に於ける上述の貿易政策は、内部に於ける政治的變革に拘らず、大體に於いて一貫して支持されてゐたと見てよい。しかしその經濟的發展は第十七世紀の中頃まで種々なる方面から妨げられてゐた。疫病の流行、火災、就中政治上の争鬭、内亂等は何れも大なる障害をなした。しかし特に資本の缺乏がかなり大なる原因をなしたと考へられる。例へば一六二〇年から數年間に亘つて起つた商業恐慌を觀察するがよい。同年英國では物價の急激な下落を生じた。貨幣制度の不完全であつたこともその一原因であつたらうが、事實上貨幣そのものが不足してゐたのである。このために東印度會社を始め、*ロソア會社*、*マアチヤント・アドヴェンチュアラス會社*等何れも大打撃を蒙つた。しかし大陸に於ける物價騰貴に呼應して、一六二五年にはその反動を惹起せしめた。(32)

かゝる状態は和蘭との競争に依つて一層苦境に陥らざるを得なかつた。勿論資本の國際性は英・蘭兩國が相敵視

しつゝあつた際でも、なほ利子の高い英國に和蘭資本が流入したことはすでに前述せる如くである。しかし假令資本の流入はあつても、和蘭の優勢な競争力に依つて、英國東印度會社も、ロシア會社も殆ど無力にされてしまった。英國東印度會社の如きは「著しく衰微したので、一六四六年に和蘭人は英國人が商賣を續けてやるのか如何かと怪しんだくらゐである。」(33)

結局英國にとつて當時必要であつたことは第一に原料生産國から精製品輸出國に轉化することであり、第二にその商敵たる和蘭を打破して、印度貿易を自己の手中に收めることであつた。和蘭製織物の輸入を阻止したり、技術を輸入して國産を奨励したのは第一の對策であり、海軍力の充實を計り(34)一六五二年、一六六四年、一六七二年の三回に亘る和蘭戰爭に於いて最後の勝利を得たのは、英國の商業的覇權成立の第一歩であつた。かくて英國の覇權の途は開け始めた。次いで佛蘭西のルイ十四世との争、Walpoleの内政整理、Pittのカナダを中心とする佛蘭西との戰爭、一七六三年の巴里條約となり、その海上に於ける優越は確立されたのである。(35)殊に島帝國として大陸に於ける戰爭の慘禍から免れ、國內に於ける産業及び資本の安全を保持することが出来たことも、英國の經濟的發展に有利であつたらう。

「近世初期の商業はこれ等商業に従事せる國々に於ける資本主義的生産組織の完成に缺くべからざる過程であつたのである。その領土の限られたる國々にあつては生産資料の必要上、それが工業國として樹立される以前に、豊富なる富源を支配することが必要であつた。而してそれ等の植民地が一方原料の供給、他方市場の擴張となり、所

謂産業革命の功を奏するに至つたのである。…要するに英國はこの條約に依つて獲得した商業上の優勢を基本として、さらに一層大なる國民的活動を始め、一方國內に於ける生産力の發達を促がし、他方海外市場の擴張を計り、こゝに近世資本主義制度を成立せしむるに至つたのである。」(36)

この海外領土を維持し得た大海軍力を創設し得たのは、明かに第十八世紀に於ける英國國民の偉大なる活動にある。勿論そこには道徳上批難を蒙るべき幾多の點を指摘し得る。未開民族に對する搾取、掠奪(37)後述するが如き貧民搾取等甚だ多い。しかし彼等はかくして得た資本を生産方面に轉化し、一方巨額なる國費を負擔しつゝ、自國生産技術を改善せしめたのである。(38)彼等が如何にして生産技術及び組織を改善發達せしめたか。手工業的技術を合同せしむるマニファクチュアへの發展、初期資本家として商業資本を産業資本に變更したClothierの役割はその資本轉化の過程を示すものであり、(39)又商業の直接影響した綿業の發展は産業革命への技術的發展が如何にして必要になつたかの過程を示すものである。(40)

(24)「中世の終る以前に、契約都市の市民は通商の際には市場税を免除されると云ふ都市間の條約の網が英國を蓋ふてゐた。又これ等は疑もなく一層完全な自由に至る途を拓いた。實にこれ等は多くの現代政治家がその助を以つて世界的自由貿易に到達することを豫期してゐる國際互惠條約と、この經濟發展の段階に於いて、正しく平行するものである。」(拙譯「アッシュレイ英國經濟史及び學說」二三四頁)

(25)「中世商人の信用機關については M. Postan の研究がある。『The abundance of mercantile debts clearly demonstrates that credit commonly entered into the commercial practice of the middle ages.』」(The Sale credit, Loans and Invest-

ments, Credit and Cash の三項に分ち歸して居る。 (“Credit in Medieval Trade,” *The Economic History Review*, Vol. I, No. 2) 又この數字後、同氏が *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Band 23, Heft 1. に寄稿した “Private Financial Instruments in Medieval England” を併讀すべからざるを得ず。同氏が Cunningham が取引上に信用を利用せること殆どなかつたと云つてゐるのに對し、第十四世紀後半から第十五世紀に於いて行はれてゐた信用證書類を以て説明を試みたのである。 “The tratta spread in England according as the conditions of trade, and above all its organization, necessitated and favoured assignments by means of commands to pay.” 又この序文に、 “L. F. Salzman がその著 “English Trade in the Middle Ages” pp. 25-42. に商業機關としての信用發展の過程をスケッチしてゐる。しかし信用の擴大を明らかにするためには、全體の商業と信用との關係並びにその性質を明かにする必要がある。未だ研究の餘地多きを分野であると思ふ。

(26) 「マンチェスター英國經濟史及び學說」一〇二—一三頁。

(27) H. L. Gray が關稅簿に依つて調査したところを依れば、次の如くである。 (English Foreign Trade from 1446 to 1482. Eileen Power and M. M. Postan 編 “Studies in English Trade in the Fifteenth Century” 中に收録。因みは本書は當時の英國商業狀態を知る上に有用な多くの論文を含む)。左表に依つて知り得ること、この時代はすでに Merchant Adventurers の進出の甚しかつたことである。英國商人が如何に進取的であつたかを知る一端となる。

	Value of the Export and of the Import Trade, 1479 to 1482.			
	Including Customs	Without Customs	Customs	
Saplers.....	Exports Wool	£74,600	£58,000	£16,600
Merchant Adventurers.	Exports Cloth	77,600	75,500	2,100

Misc. Mdse.	6,300	6,000	300	
Total denizen exports	£158,500	£139,500		
Merchant Adventurers.	Imports Wine	24,000	23,100	900
Misc. Mdse.	121,800	116,300	5,500	
Total denizen imports	£145,800	£139,400		
Handards	Exports Cloth	29,300	28,600	
Misc. Mdse.	3,000	3,000	700	
Total	£32,300	£31,600		
Imports Misc. Mdse.	23,300	23,000		
Wax	5,500	5,500	300	
Total	£28,800	28,500		
Non-Hanseatic Aliens.	Exports Wool	14,500	10,500	4,000
Cloth	31,600	29,900	1,700	
Misc. Mdse.	5,300	5,000	300	
Total	£51,400	£45,400		
Imports Wine	5,200	5,000	200	
Misc. Mdse.	29,800	28,100	1,700	
Total	£35,000	£33,100	£34,300	

- (32) W. A. S. Hewins, "English Trade and Finance." は貿易會社の概括的知識を得るに便利である。拙著「英國經濟史概論」一六九—一七九頁參照。
- (33) Earl J. Hamilton, Monetary Inflation in Castile, 1598-1660. (The Economic Journal, Economic History, vol. II, No. 6) 後山氏著 "American Treasure and the Price Revolution in Spain, 1501-1650. (1934) 中譯版がある。高橋象平氏の紹介參照(『三田學會雜誌』第二十九卷第一號所載)
- (34) 前註並びに拙著「近世經濟史概論」一〇—一五頁參照。
- (35) 本文に論じた理由からすべて貿易並びに植民地獲得を中心として見た。従つて貿易會社の場合に於いてもその組織等については殆ど論及しなかつた。
- (36) "One of the most memorable depressions in the annals of the English textile industries began in 1629, and lasted four or five years. The export trade declined by one third; the price of wool fell; clothiers, even those reputed the wealthiest, were brought to the verge of bankruptcy; and unemployment was widespread." 委員會の報告は頗る廣汎なもので大體九つに分けられた。その第八は "The scarcity of coin at home and the baseness of foreign coins compared unto ours." 譯は Lipson, "The Economic History of England." Vol. III, pp. 305-9. 參照)
- (37) 「英國資本主義成立史」四七二頁。和蘭との關係はこうして、ハックヤク社を以てして J. E. Neale, "Elizabeth and Netherlands, 1586-7." (The English Historical Review, Vol. XLV, No. 179) がある。そして體裁として維新史記としてあるのは、當時の軍事費の資給として有用である。
- (38) 第十七世紀初期に於いては商船と軍艦との區別は明瞭である。然るにこれが専門的になつたのは英國の勝利の原因である。But the seventeenth century saw the rise of highly professional navies, prolonged campaigns at sea, and

an altered technique of fighting, in which boarding and hand-to-hand combat yielded slowly—but not entirely—to reliance on guns. With the recognition of ordnance as the major factor in naval victory came certain structural alterations in the fightingship to accommodate more and bigger guns. Before the middle of the century the English navy, which was in advance of Continental navies in this adaption, had developed distinctive fighting types: the great ship and the frigate." (Violet Barbour, "Dutch and English Merchant Shipping in the Seventeenth Century," The Economic History Review, Vol. II, No. 2) 上の論文は後の私の體裁として採り込まれた。

(39) "The success of Great Britain can hardly be overestimated. She had enhanced her prestige a hundredfold; she had overthrown French maritime power, and, as the result of the first serious struggle for colonial and commercial supremacy, had secured a dominant position. The chief glory of England's brilliant conduct of the War undoubtedly belongs to Pitt: he had dominated the stage of politics, and in four years of outstanding statesmanship had made acquisitions for English power of pre-eminent importance. In 1763, despite her hesitant irresolution at the Peace, England stood out as one of the chief commercial nations and as the first colonial power of the world." (W. T. Selley, "England in the Eighteenth Century," 1934, p. 100.) Selley の新著に於けるこの結論は勿論何人も異論はないであらう。しかしこの結果を單に Pitt の卓越せる政治的才能にのみ歸することは賛成し得ない。前註に述べしやうな英國海軍力の進歩及び後註に示す英國商人の發展に援助するものとせば、換言すれば英國民の發展力に基づく當然の結果であらう。

- (36) 「英國資本主義成立史」五八三—三頁。
- (37) 拙稿「英國阿弗利加會社と黒奴貿易」に云へる如く、黒奴賣買の如き最も批難されるべきものの一つであらう。
- (38) 英國商人が商人として最も模範的の典型であると云はれるが、特にこの英國の發展時代に於いて彼等が如何に努力した

かを知る多くの例がある。今一二の例を取れば William Braud のポルトガル貿易の如きはその一つであらう。(前掲註一四の Sutherland の著書参照)。又 G. Ambrose, "English Traders at Aleppo, 1658-1756" (The Economic History Review, Vol. III, No. 2.) に引用せられる Levant Company の記録を見ても知り得る。又一六七二年英國東印度會社が撚絲職人、織工、染工等を印度に差向け、土人の織工に歐洲市場に適するやうな織物の製法を教へさせたが如きは、如何に彼等がその販路擴大に熱心であつたかを知り得るであらう。(成立史「五一二頁」)

(39) 前掲拙稿「初期資本家形態としての Clothier」

(40) 前掲拙稿「英國綿業の發達と商業」この論文は一九三〇年に書いたものであるが、その後 A. P. Wadsworth and Julia de Lacy Mann, "The Cotton Trade and Industrial Lancashire, 1600-1780," (1931) を手にした。五百頁餘の大冊で勿論詳細に兩者の關係が述べられてゐる。(三田學會雜誌第二十七卷第七號所載の紹介参照)。その紹介に綿業史の研究に關しては、初期この時代のものは頗る多いが、この以後について甚しく乏しいやうに感ぜられると記して置いたところ、最近 Arthur Redford, "Manchester Merchants and Foreign Trade, 1794-1838," (1934) を見ることが出來た。こゝには關係がないが、附記して置く。

六

第十七世紀に於いて英國はその生産技術の點に於いて甚しく後れてゐた。このことはすでに以前に於いて屢々指摘したところである。(41) 殊に一國の産業發展に最も大なる缺陷と思はれることは交通機關の不備と云ふことであつた。和蘭はすでに第十八世紀の中頃には、立派な水路と舗装された滑かな道路を有してゐた。之に反して英國は一七五〇年には未だ車を十分に通じ得るほどの道路さへ少なかつた。しかし前述の如き國力の發展が對外貿易の増進

と共に併行して進むにつれて、國內交通機關の完成は絶対に必要となつて來た。原料生産地と製造地、製造地と市場との連絡。又中央政府が戰時動員を行ふに當つても、さらに又増大して行つた都市への食料輸送にも完全な道路の發展が必要とせられる。(42) これ等の點から交通設備が先づ改善される必要があつた。その觀點から當時の交通機關たる道路及び運河の改革を明かにするために次ぎの二篇の論文を發表した。

「英國に於ける道路の發達と産業革命」(三田學會雜誌「第二十三卷第十號所載」)

「運河と産業革命」(同上第二十四卷第三號所載)

鐵道發達前に於ける第一期産業革命時代及びその以前の交通機關として、道路と運河の發達は急激に英國の社會状態に變化を與へたのである。今までの地方的孤立經濟の形態は一掃されたのである。交通機關の改善は常に一方に於いて原料の價格、その他の生産費を低下せしめ、他方に於いて市場の擴大を意味する。(43) 英國に於ける交通機關の發達は産業革命の技術的改善と相互作用をなしつつ發展して來たのである。前述の如く先進國の技術を取入れた英國人は今や自ら技術の發明をなさなければならぬ地位に進んで來たのである。

従つてこゝに生じて來た新しい社會状態から從來存在しなかつた新しい階級の發生を見た。それは初期に於いては貧民階級であり、後に無産勞働者階級を構成するものである。この新しい社會分子は、表面に於ける英國の華々しい對外發展に併行して、漸次に重要なものとなつて行つたのである。それが如何にして發生し、如何にして發展して來たかを歴史的に辿らんと試みたのが左の諸論文である。

「産業革命前に於ける英國社會狀態概論」(三田學會雜誌第二十二卷第八號所載)

「英國に於ける労働者階級の發生」(同上第二十三卷第二號所載)

「英國初期救貧法と労働者階級」(經濟史研究第六號所載)

「英國綿業に於ける家内労働者」(三田學會雜誌第二十四卷第十二號所載)

中世の傳統的生活基準が破壊され、一方營利に依つて富の集積が行はれると共に、他方多數の貧民を生じた。無産労働者群の存在がかなり古い時代に遡つてこれを求めることが出来る。しかし中世以前に於ける貧民と異なり、彼等の生活は社會的に何等の保障をも受けてゐない。自由の美名の下に、彼等は中世的束縛からは解放された。シエクスピア時代には未だ聞かれなかつた *self-made man, self-reliance, self-control* と云ふやうな言葉が、英國人の間に自信を以つて述べられるやうになつた。自助と克己とに依つて自ら開拓する力強い個人が世界史の舵を握ると解せられた。この考へ方は唯神論的に基礎づけられた樂觀主義——各人は自己のために、神は吾人萬人のために——に基く良心の自由への戦の下に發達して來た。(45) しかしこれは貧民にとつて何等の自由でもなかつた。中世の救貧と云ふ富者の義務がこの新しい倫理觀念に依つて解放さるゝや、貧民の社會的地位は公然と悪化さるゝまゝに放置されたのであつた。(46)

しかし資本主義制度を完成せしむるためには貧民の存在を必要としたのである。各方面から生じつゝあつた無産労働者階級は、こゝに近世工場制度を運用する油として一集團を生成するに至つたのである。(47) 彼等は初期の資

本主義的傾向が始まると共に貧窮化して來た。英國に於いては圍牆に依つて先づ行はれた。彼等は生活のために都會に集まり、工場に通ふ。「工場が貧窮の原因ではなく、貧窮が工場的前提である。」(48) この意味に於いて資本主義制度の發達過程に彼等は最も重要な役割を有してゐたのである。

以上に依つて私は大體英國に於いて資本主義が形成される迄の過程を、その主要な點について跡づけて來た。未だ論ぜらるべき幾多の點が残されてゐるが、その中心點は大體これと論じ得たと思ふ。その結果は何等新しいものではない。唯第十八世紀の初頭までは未だ幾多の後進性を有してゐた英國が僅か半世紀ぐらゐの間にアングロ・サクソンの優秀性を世界に誇り得るほどの發展をなしたことは驚くべきことである。しかしその由來を考へれば英國自身の内部的發展力と外部的影響とに分かつことが出来る。そしてこの兩者の幸運なる——偶然と云ふ言葉を使ふことも可能かも知れぬ——一致がこれを生じたのである。しかもその内部的原因にはその富源、資本、技術と云ふやうな經濟的原因よりも、中央政府に依る鞏固なる統一、英國人自身の云ふところに従へば、吾人の人格や財産が安全に保障されるよき政府(49) と云ふやうな政治的原因がかなり強く作用してゐることは注意に値することであらう。資本主義制度成立以後にこのことが如何に作用したかは、今こゝでの問題ではない。(50)

(41) この時代に技術と云ふことを如何に解してゐたかと云ふ問題について E. A. J. Johnson は "The Mercantilist Concept of 'Art' and 'Ingenious Labour'" と云ふ論文を發表してゐる。(The Economic Journal, Economic History, Vol. II, No. 6) 技術を一種の不思議な生産力と解してゐるところに興味が多い。

(42) 家畜の運搬についての一例。"The driving of geese and turkeys from Norfolk, Suffolk and Cambridgeshire to Lon-

don has been widely commented upon. They began their journey of some 100 odd miles in August just after the harvest had been completed and took about three months to reach the Metropolis. Defoe estimated that some 150,000 turkeys got to London in this way: he does not estimate the number of geese." (G. F. Fussell and Constance Goodman, "Eighteenth Century Traffic in Live-stock," The Economic Journal, Economic History, Vol. III, No. 11)

(43) 拙著「近世經濟史概論」一七九頁以下。

(44) 上掲拙稿「英國綿業に於ける家内労働者」中に機械の發明その他について述べてある。故にここではそれ等を問題としない。

(45) G. von Schulze-Gävernitz, "Die industrielle Revolution." (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 66) の論文は短くはあるが示唆的である。

(46) 上掲拙稿「英國初期救貧法と労働者階級」参照。又マアカンチリストの貧民に對する搾取的態度については、高橋誠一郎著「重商主義經濟學說研究」七一八頁以下参照。

(47) 上掲拙稿「英國に於ける労働者階級の發生」参照。

(48) Schulze-Gävernitz, op. cit.

(49) トオヤン・ソラン・シラント・リニエスが一八一六年下院に於いて述べたる言葉である。William Page, "Commerce and Industry," vol. I, p. 1. より引用。

(50) 拙著「英國經濟史概論」第七章以下参照。

この論文は私が従來英國資本主義の成立過程を研究して來た道筋を明かにするために書かれたものである。この點について豫め讀者に御諒承を乞ふ。

(昭和十一年三月廿五日稿)

ジャン・メリエとその遺書

平井 新

(一) 略譜(一)

ジャン・メリエ(Jean Meslier 又は Mellier)は一六六四年六月十五日シャンパンニアニ(現今の Ardennes 縣)のマゼルニエ村(Mazerny)で一職匠 Gérard Mellier と其妻 Symphonienne Braily の子として生れた。隣村の一牧師は早くも此兒の天賦に着眼し、彼を引取り羅典語を教へ、後に至つて彼を Châlons-sur-Marne の神學校に入学させた。メリエはここで專攻の神學の外に熱心にデカルトの哲學を研究した。操行方正の故に總ての上司の尊敬をうけた。一六八八年、僧職を授けられて後、暫らく副牧師の職にあつたが、一六九二年アルデンヌ縣エトレピニイ Etrepigny の牧師となり、爾來死に至る迄渝る事がなかつた。此地の教會記録への彼の最初の登記は一六九二年一月六日となつてゐる。傳記家の傳ふる如くんば、彼は極めて謹直且つ忠實に僧職を履行したのであつた。だがメリエ自身は有體にこう言つてゐる、「余は常に非常なる嫌惡と大なる怠慢とを以て此職を果した」と。

彼の生涯は極めて隱遁的であつた。彼の交友としては唯、近隣の二人にすぎず一七二三年唯一度巴里に旅行しただ